

特集

平和を願う人にお薦めしたい

〈戦争に関する本〉の紹介

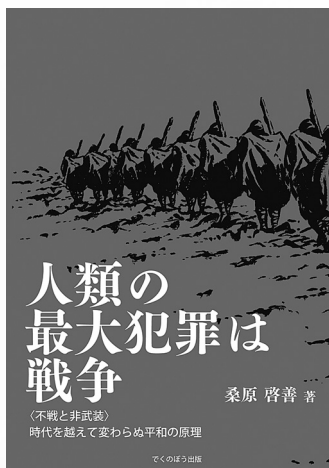
地球上から戦争がなくなるように、私たちの
〈心の中に平和のとりで〉をつくろう。

山波財団の会員の方々に、「生命の樹」(月刊誌) 2018年
4月号で平和を願う人にお薦めしたい 〈戦争に関する本〉
の紹介を募集しました。沢山の方が沢山の本や映画をご紹介
下さいました。まことにありがとうございます。

人類の最大犯罪は戦争

〈不戦と非武装〉
時代を越えて変わらぬ平和の原理

桑原啓善
でくのぼう出版
2010



「人類の最大犯罪は戦争」を「今」「あなた」
に読んでいただきたい

鹿児島県 松下恵子

この本の題名を見たとき、その通りと思いました。
恒久平和実現の要件が本の見開きに書いてあり考えさせ
られました。

なぜ歴史は繰り返すのか？

最大の戦争の被害者、死んだ人達の事を考えずに、生者の幸福（救い）だけを計り考えようとするから。いのちは一つ（数えられないもの、数えてはいけないもの）なのに、生者の方の数だけを一生懸命に数えるから。「一個で全部、これが答え」、死者の言い分を聞きなさい。と書いてあったのでこの本の160頁からの詩を読ませていただいたら「一個が全部」なので自分が戦争に行つたように感じて胸がしめつけられるように悲しく、苦しさ伝わって来ました。

「いのちは一つ」なので自分から平和を望んでユネスコ憲章「前文」

「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない。」
とまさしく書いてある通りだと思いました。「人」を「私」に替えて読むとはっきりわかりました。

地球上から戦争がなくなるように願っている「あなた」、でくのぼう出版から発行されています。桑原啓善著の『人類の最大犯罪は戦争』をお薦めいたします。

昭和57年から昭和59年にかけて、一人で日本全国各地を巡って「不戦のための自作詩朗読と講演会」をした講演記録です。

最大の戦争の被害者は死んだ人達。いのちは一つ、一個で全部。戦争反対反対の平和運動はいつまでも不毛です。平和の名前を呼べばいいのです。これを教える本です。本当の平和な世界を作るために、「いのちは一つ」とはどういうことか、じっくり読みたい。

私の人生の道しるべとなる一冊

神奈川県 堀内真弓

本書は、山波言太郎（桑原啓善）先生が、1982年から1984年にかけて、日本全国を巡って、「不戦のための詩朗読と講演会」（たった一人の平和運動）をされた講演の記録です（「サムライ・平和」4、6、10号に収録）。講演会の内容は、冒頭の〈恒久平和実現の要件〉に集約されています。ここに書かれていることの真意を自己を変革するところまで深め、自らそれを生きることができれば、本当

の平和を実現することができる、これしか道はない、しかし、それは生半可な道ではない、というのが数年前に初めて本書を読んだときの思いでした。

山波先生の平和運動の原点となったのは、未だ癒えることのない戦死者からのメッセージであり、彼らの声を代弁し、「一切の武器を捨て、戦争を止めよ。」（本書20頁）と伝えていきます。

「平和とは、基本において、生命の尊厳ではないでしょうか。生者も死者も分けへだてない生命の尊重。平和とは、恐らく生者を生き残らせると共に、死者を生き返らせることだと思えます。いま、この困難な核戦争の危機の時代を、吾々が生き残るためには、死者を生き返らせる程の「いのち」への愛が要求されていると思えます。だから、私は戦死者の声を代弁致します。」（20頁）

この言葉を前にして、今、生きている者として、戦死者の方々にとても顔向けできないような生き方をしている自分を、本当に情けなく思いました。それから、少しでも戦死者の方々の痛みを知りたい、「いのちは一つ」をハートでわかりたいとの思いから、〈恒久平和実現の要件〉と本書の「注」に載っている9篇の詩を繰り返し声に出して朗読し始めました。少しずつですが、何かに触れる思いがす

る時があり、「詩」は、死者と生者を繋ぐ力があることを感じました。また、数年前に、山波財団の講座で、本書の輪読会があり参加しましたが、その時は、本書の言葉が身体に入ってこない、何か本当のところ、ぼやけて見えてこないというもどかしさで一杯でした。これも何年もかけて、繰り返し読み返しているうちに、だんだんと霧が晴れるように、言葉が胸に落ちてくるようになりました。

「それは、吾々が反核・軍縮と叫ぶ時、不戦・非武装と叫ぶ時、どれほどその日常生活に於いて、吾々が精神や生命を、金や物や力よりも大切なものとして生きているか、どれほど、それに生命を賭けているか、それによってその叫びの声の大きさが定まります。決して、その肉声の大きさをなく、実は、見えないところから聞こえてくる庶民達の、生命と精神の価値に賭けた、そのいのちの、大きさによって定まるのです。

それだけが今、世界を変えることの出来る、残された一本の細い絆だと思えます。」(62、63頁) (傍線・桑原)

山波先生に学んだ決死の愛と奉仕の道、この平和への細い一本の道を、日常生活においてどれだけ愛を込めて生きられるか、確固たる道しるべである本書を携えて邁進していきたいと思えます。

茨城県 八木悦子

『人類の最大犯罪は戦争』に「非武装平和の原理」について「生を断念して、いのちへの愛・他者への愛によって捨てる」という条件付きで、自分が武器を捨てる、すると相手も武器を捨てる、そして「生の断念」とは、死を覚悟して「捨て身」(決死)になること、とある。

これが平和へと繋がる一筋の道ではないだろうか。

日本が戦ってくれて

感謝しています

アジアが賞賛する日本とあの戦争

井上和彦

産経新聞出版

2013

お薦め本の紹介

石川県 森下真愛

この題名を見て戦争賛美だとか、拒否反応を起こす方がおられるかも知れませんが、そついうことではありません。真実を知らなければ正しい方向も見えてこないのです。

東南アジア諸国・インド・及び元日本領のパラオや台湾の取材記録が主なのですが、反日感情の支配する国はま

ず無い：それどころか、「うちの国が独立国になれたのは、あの戦争（第二次大戦）で日本が戦ってくれたおかげだ」というのが常識だそうです。具体的に日本軍がどう戦ったかということも詳細な史実が書かれており、自虐史観などは一片もありません。どこが「侵略戦争」なのか？ こういう事を当の日本人の殆どが知らず、マスコミも報道しないのは、GHQにまだ洗脳されているということですよ。

台湾についての章では、日本統治時代に育った方々の言葉に多くの頁が割かれてあり、これが涙無しには読めない：この方達は元日本人であり戦友だったことがよく分かります。筆者の井上氏は、台湾を訪れる度に涙腺が緩みつつ放しだという趣旨の事を書いておられました。読んでいるほうも同様でした。かの有名な「高砂義勇隊」の話も改めてよく知ることができます。他の本によれば、現在でも台湾は、いつ何時中国に侵略されるかも知れない状況のようです。なぜ日本は中国・韓国などにへつらう事を止め、中国に向かつては「我が舎弟に手を出すな」と堂々と言わないのでしょうか？（そんな事をしたら宣戦布告ととられそうですよ）：そう思ってしまう位、日本時代の台湾の方々の日本への愛が伝わってきます。

「戦いはまだ終わらず」。

日本に着せられた汚名を返上し、名誉を挽回するまで戦いは終わらない。」

こう書かれている通りです。

GHQは日本人の本来の力を怖れ、「日本人が二度と立ち上がらないように」自虐史観を植え付けたのです。

今、日本人が立ち上がる時です。封印された真実を知らねばなりません。

「大東亜共栄圏を守れ」この言葉はそのままでの意味だったのです！

お薦めどころか、全ての日本人が読むべき本だと思いません。

六千人の命のビザ

杉原幸子 ゆきこ
大正出版
1993

千万人と雖も吾往かん いまだ われゆ

千葉県 林博子

1940（昭和15）年7月27日早朝、リトアニアのカウナスにある日本領事館はナチス・ドイツ軍による逮捕、虐

殺の難を逃れ、艱難辛苦の大移動の末、ソ連、日本を経由し第三国へ移住する為の日本通過ビザの発給を求める、ポーランドから脱出して来た大勢のユダヤ系の人々に取り囲まれました。これは、日本政府の命に背き、領事館閉鎖後もカウナス駅を離れる汽車の窓から身を乗り出しながらも、一人でも多くのユダヤ人を救いたいと最後迄手書きの許可証を書き続けた、リトアニア副領事杉原千畝と幸子夫人ご家族の命を懸けたユダヤ人六千人の生命の救出「魂の物語」です。敗戦後、囚われの身となつてからの収容所生活、苛酷な状況下でのソ連通過の為の貨物列車による移送、日本への引き揚げ船での長旅を経て、やっとの思いで祖国日本の土を踏んだ夫妻を待ち受けていたのは、本省の命令に反してビザの発給をした事を理由とした外務省からの辞職勧告と云う冷たい仕打ちでした。当時省内にはカウナス領事館での一か月に及ぶ杉原氏の行動を「リトアニア事件」と呼ぶ人も居たと云う事ですが、目の前のユダヤ人達の置かれている窮状を理解し、ビザ交付の決断に迷い眠れぬ夜を過し、三度の請訓電報にも本省の「否」との回答に覚悟を決め「私を頼つて来る人々を見捨てる訳にはいかない。でなければ私は神に背く。」と後にその時の決死の想いを語られた杉原氏はその後のひと月、痛みに動けなくなつた

手に持っていた万年筆が折れ、ペンにインクを付けながらもビザを書き続けました。自身の職業、地位、生命迄も賭けて発給し続けたビザにより救われた六千人のユダヤ人は世界各地に移住し、ポロポロにすり切れたビザを大切に保管し《異邦人の中の聖なる人》と杉原氏を崇敬し続けているのです。この本を読み終えて後杉原氏が「人としてあたり前のことをしただけ。」と云う事を果たして今の日本人（私も含めて）幾人の人が為し得ようかと思いました。自己保身の為に時の政権の中枢のご意向を忖度し、黒を白と云い張り、行政を平気で歪める官僚や政治家、今の日本の政治の有り様を天の上からご覧になつて杉原氏は「こんな戦後日本を見る為に私達は生命を懸けたのではなかった。」と嘆いておられることでしょう。現在の日本、国際情勢を見るにつけ、今こそ私達一人一人が杉原夫妻の決死の行いに習い、自身の目の前の人、モノ、仕事を通して「千万人と雖も吾往かん」の気概を持つて何事にもあたり、この日本から世界を変えてゆく、その時が来ていると私には思えてなりません。最後に、幸子夫人の次の言葉をもって、私のこの本の紹介文とさせて戴きます。

「もう一度戦争の悲惨な歴史をふり返り、心に「愛」という言葉を彫んでください。」

もしも魔法が使えたら

戦争孤児11人の記憶

星野光世

講談社

2017

茨城県 大沢均

この本は、戦争によって孤児となった子供達が敗戦後の日本で彷徨い続けた記録です。

作者である星野光世さんは、ご自身の新潟での結婚式で「あの嫁さん、どこの馬の骨や……。」と囁かれていたことを聞かされ「誰が好き好んで孤児になったというのでしょうか。蔑まれるべきは、残された子どもではなく、親を奪った『あの戦争』ではないでしょうか。」と。

戦争によって孤児になってしまったのに世間では浮浪児と呼ばれ、まともな扱いを受けることなく、上野駅周辺ではトラックに孤児達を乗せ、山に捨てに行く「狩り込み」という無慈悲な行政の対応は、親を亡くし、親戚をたらい回しされ、浮浪児となった子供達が辿る運命としては余りにも理不尽だと心から思いました。

本の絵は星野さんご自身で描かれています。白黒と色彩画の絵は地獄と天国を描いているように感じました。

現代では「ストリートチルドレン」が「浮浪児」と同意語なのでしょうが、私達は今戦場となっているシリアは勿論、増え続ける現代の浮浪児である子供達を救う手立てを未だに持っていません。

私は、星野さんを始め11名の戦争の記憶を現代に残すべき遺産とし、戦争によって起こる残酷な現実を語るための教材にして行きたいと強く思いました。

最後に書かれている「もしも魔法が使えたら」という詩がこの本の著書名になっています。でも魔法なんて使わなかつたって誰もが平凡に暮らすことができる世の中であつて欲しいし、その権利を奪う全ての行為を許してはならないと心から念願します。

沖縄に捧げる歌

萩原実詩集

萩原実

アポロン社

1976

戦争に関する本の紹介

この本は桑原（山波）先生の詩集『同年の兵士達へ』に

広島県 悦喜生祥

深い感銘を受けて書かれたという事で、著者は先生と同じ「詩洋」で活躍されていた方のようです。

現在、古本でしか入手できないのですが、それでも紹介したいのは、この詩集には桑原（山波）先生の「跋 詩人萩原実について」という一文が載っているからです。

ここで桑原先生は、
「この『沖繩に捧げる歌』は、霹靂のような感動をもって私を打ち倒してしまった。

これは単なる鎮魂歌ではない。戦争という極限の中でとらえられた、人間の生存と死を追求した壮麗なるシンフォニーである。……それは私の『同年の兵士達へ』が及びえなかつた人間の原点に迫る、悲しみとうめきから、高らかに歌いあげられたいのちの歌である。」
とこの詩集を絶賛されています。

そして、高貴な文体で、詩の中身を解説されているのですが、それを読むだけで戦争というものがどういうものか理解が深まっていきます。

桑原先生はこうも書いています。
「このような戦争文学は、生き残った誰かによって書かれねばならなかつた。そしてその最もふさわしい者は萩原さんの年代の者ではなからうか。……萩原さんも私も大

正十年生まれである。

だから、小学校から大学に至る同窓会名簿をみると、たくさんのお虫食いのように、住所欄が欠如している。

そして（戦死）と記してある。…彼等一人一人の顔が浮かんで来て、眠れない夜がある。」

正直、私はこの本を買ってから、桑原先生の「跋」しか読んでいませんでした。

この度、詩の中身の方も少しずつ読み始めてみて、そして何回か繰り返し（たまに朗読しながら）読んでいくうちに、皮膚感覚で、この詩集は凄いと感じるようになりました。

『同年の兵士達へ』と対をなす、何か夫婦のような詩集ではないか、とも感じていました。

もし見つけることができましたら、ぜひ読んでみて下さい。

職業は武装解除

瀬谷ルミ子
朝日新聞出版
2011

「武装解除のプロフェッショナル」

千葉県 林高弘

高校三年生の少女が新聞に載っていたある写真を見て、

自らの進路を決意し、世界の紛争地を変えていく現場に携わった経験を綴った著書である。

彼女の専門は、D D R — 兵士の武装解除 (Disarmament)、動員解除 (Demobilization)、社会復帰 (Reintegration) — である。なんと武器を捨てさせる専門の職業があるのである。

著作の中で、こんな問いがある。

「子ども兵士は加害者か、被害者か

両親を殺され孤児になった子どもと、三十人を殺した子ども。手を差し伸べられるべきなのは、どちらだろう？」

実際に現場に行つて体験したことを基にした問いには考えさせられる。シエラリオネの紛争の話である。

また、アフガニスタンの武装解除の現場では兵士にこう言われている。

「日本が言うから、信頼して武器を差し出すんだ。アフガニスタンの民を無差別に空爆しているアメリカやイギリスに言われたら、撃ち殺してやる」

こういう言葉を聞けば、日本が世界にどう見られているか、更に日本が果たすべき役割がわかつてくるのではないか。紛争が終わっても、すぐには平和は訪れない。それは人々が生きるすべを失っているからである。著者は、国連を辞

した後、「紛争地の人々に生きる選択肢を増やす」ことを目的とした組織に入る。

武装解除の現実だけでなく、その後の平和活動の実務を描くとともに、今後の世界における女性の活躍を予感させる一冊である。

武装解除

紛争屋が見た世界

伊勢崎賢治
〈講談社現代新書〉
講談社

2004

「武装解除の現実」

千葉県 林 高弘

著者は、東チモール、シエラリオネ、アフガニスタンで紛争処理を指揮した人物である。

その著者が、こう言う。

「なぜ、紛争が起こるのか？」

それは、首謀者に政治的野心があるからである。」

シエラリオネで蜂起したRUFは、一党独裁、腐敗を理由にした現政権に対する革命であった。しかしこの「革命」が子供の手足を切り落とすまでの大虐殺を引き起こす

とは、誰も予想できなかったのである。

こうなると誰が正義かわからなくなる。この紛争を収束させ、和平を合意させるため、国際社会は、RUFが犯した世紀の戦争犯罪を完全恩赦にしたのである。このため民衆は、和解という暴力を受けるのである。せめて、首謀者だけでも裁いて欲しいとしても、強制和解なのである。

こうなるとこんな疑問が湧いてくる。

「何が本当に正しいのか？ 他に手段はなかったのか？」

「和平の真の意味は？ 民衆の感情はどうなっても良いのか？」

本書にも書かれているとおり、他にも紛争処理やその後の無償・有償援助の泥臭い金がらみの話がある。著者は、いくつかの紛争現場を通じて、我々にもはや避けては通れない現実を見せつける。日本人が直接体験した、「紛争処理の現実」を認識するための一冊である。

宝の海をまもりたい 沖繩・辺野古

いんやくのりこ
現代思潮新社
2016

沖繩の人の心を歌とともに知る本

東京都 保坂ゆかり

琉球王国から現在まで、昔の伝承や琉歌等とともに書かれています。著者は東日本大震災の後に小さい子どもさんと東京から沖繩へ移住しました。友人に誘われてバスツアーで辺野古へ。浜では三線の「かぎやで風」（長寿の祝い歌）に合わせて中学生が琉球舞踊を披露していました。基地建設計画の阻止に尽力してきた90歳台のおじいさんが、海の神様にお祈りしてから「戦場の地獄にもう二度と若者を送ってはいけません。私たちは絶対に負けない。なぜなら決してあきらめないからです」と語ったそうです。「沖繩のガンジー」とよばれた阿波根昌鴻さんの活動も紹介されています。「平和の最大の敵は、無関心である。戦争の最大の友も無関心である」と語ったそうです。

山波先生に自然を愛しなさいと教わりましたが、皆さん、コンクリートの巨大な塊に押しつぶされたサンゴの写真を